



## 関東地方を通り越したカミキリたち

高 桑 正 敏

もう5、6年も前になると思うが、いくつかのカミキリについて「それほど珍品でもなくて、中部と東北の両地方に分布するのに、どうして関東で採れないんだろう」と露木繁雄氏と話し合ったことがある。時間がなくて十分な資料を集めることはできなかったが、同好者に注意を促す意味から、ここにそうしたカミキリの存在を書き留めておくことにする。

関東地方はその大部分が歴史の新しい沖積層（関東平野）で占められ、しかも東と南は海に面する一方、北と西の多くは山地となってカミキリの分布拡大に多少とも障害を与えているように見える。このことは、関東地方が他に対する行政区分の意味あいだけではなく、昆虫の分布を考えるうえでも好都合な自然区分と捉えて差支えなからう。したがって関東地方における分布の有無を論ずることは、その種の分布相の認識に充分な手掛りを与えてくれるものと考えられる。

三国山脈によって明瞭に表日本気候と裏日本気候とに分けられるように、裏日本型の分布を示す種類は関東地方においては分布が局限されるか、あるいはまったく記録されていない場合がある。この典型としてミワヒメハナカミキリ *Pidonia miwai* (MATSUSHITA) [ただし群馬県北部にも分布] が知られる (KUBOKI, 1977) が、採集例が少なくはつきりしないものサドチビアメイロカミキリ *Obrium japonicum* PIC およびヒゲナガアメイロカミキリ *Obrium longicorne* BATES (図1)、そしてチャイロチビヒラタカミキリ *Phymatodes* (*Phymatodellus*) *vandykei* GRESSITT もこの分布型と考えてよいだろう。さらに、裏日本型の延長として大陸にも分布する種の代表にキモンハナカミキリ *Leptura duodecimguttata* FABRICIUS [ただし東京都奥多摩にも分布] とムモンベニカミキリ *Amarysius sanguinipennis* (BLESSIG) (図2) があり、これらは周日本海要素の重要な因子と言いうる。ケブカヒラタカミキリ *Nothorhina punctata* (FABRICIUS) もこのパターンと思われるが、それにしては国外での分布

状態が気に入らない。

上にあげた種は、現在まで関東地方から未発見であっても、いずれ調査が進めば辺縁部などで採集される可能性が高いものばかりである。ところが、以下に記す7種は、将来も関東地方から発見される可能性が低いと予想されるものが多い。

イガブチヒゲハナカミキリ *Anoplodera* (*Corymbia*) *igai* (TAMANUKI): 九州と四国の山地、紀伊山地、中部山岳、富士山、三ヶ峠、それに東北方面では飯豊山と岩手県下から採集されている(図3)。実は関東地方でも斎藤良夫(1962)による秩父白岩山の記録があるのだが、これは、1) 写真の♀個体を見る限りでは(不鮮明なため断定できないが)前胸の形、上翅の点刻の具合などむしろブチヒゲハナカミキリに近く、2) 同リスト中にはブチヒゲハナカミキリの記録がない(奥秩父には普通に分布するにもかかわらず)ことから同定に疑問があり、ここではいちおう除外して扱っておく。

タケウチホソハナカミキリ *Strangalia* (*Sulcatostrangalia*) *takeuchii* MATSUSHITA et TAMANUKI: 九州、四国、紀伊山地、三河段戸山、南アルプス、北アルプス、松本市屏温泉、富士山、それに東北地方からはいわき市のみから見つかっている。北海道にも産するが、本州産とは少々違いがある。

クロサワヒメコバナカミキリ *Epania septemtrionalis* HAYASHI: 原亜種が四国山地、島根県、紀伊山地、長野県平岩、それに東北地方では福島県南会津郡下郷町(旭田村)と館岩村湯の花のみから得られている。奄美大島には別亜種 subsp. *shibatai* HAYASHI を産するという。

カエデヒゲナガコバナカミキリ *Molorchus* (*Lionomus*) *ishiharai* OHBAYASHI: 宮崎県北部山地、四国山地、中国地方全県に分布し、近畿地方を飛ばして東海地方の低山帯に広く産し、さらに長野県下や佐渡に局地的に分布する。東北地方からは福島県松枝岐と会津地方のみから発見され、北海道と利尻島にも分布する(図4)。

クビアカトラカミキリ *Xylotrechus rufilius* BATES: 屋久島, 対馬, 九州, 四国, 中国地方と広く分布し, 兵庫, 和歌山, 福井, 富山県下, 南アルプス一帯, 佐渡, それに東北地方では福島県北部山地, 山形県下, 岩手県陸中, 十和田などから採集され, 北海道からも記録がある。国外では朝鮮, 中国, 樺太から知られる(図5)。

フタスジゴマフカミキリ *Mesosa (Perimesosa) cribrata* BATES: 鹿児島県下, 対馬, 四国剣山, 岡山県下, 長野県伊那谷, 福島県桜枝岐, 北海道に分布するだけで, クロサワヒメコバナカミキリと同様に産地がきわめて少ない種である。鹿児島では佐多岬でも得られているのに, 本州中央部では内陸盆地から発見されているのはおもしろい。佐多岬と対馬の場合は幼虫はクロマツを食し, 本州中央部ではクルミ類を食している本州に因縁があるのかもしれない。九州方面と本州以北では亜種が分れるが, その差は筆者には判らない。

エゾナガヒゲカミキリ *Jezohammus nubilus* MATSUSHITA: 宮崎・熊本両県, 四国, 中国地方東半部, 大阪府下, 北アルプス東麓部, 南アルプス西麓部, それに東北地方では福島県北部および会津地方, 鳥海山, 十和田, さらに北海道西南部に分布する(図6)。

この他に興味深い分布を示すものとしてカラフトヒゲナガカミキリ *Monochamus saltuarius* (GEBLER) があつたが, この種は最近茨城県下より発見され, 隣接するいわき市でも多産地が見つかつて, 関東でも茨城県下に分布することは確実となった。

さて, イガブチヒゲハナカミキリからエゾナガヒゲカミキリまでの7種の分布を見ると, 奇妙なことに, そのいずれもが九州や四国など西南日本にも産するが決して暖地性の種ではない(クロサワヒメコバナカミキリは1亜種を奄美大島に産すると言うけれども)こと, だいたいにおいて東日本ないし東北日本に行くとその分布が局地的となることがわかる(東北地方では福島, 山形, 青森県以外での分布調査はほとんどされていないことを念頭に置いて)。この逆に, 日本では北海道方面に分布の中心がある種のいくつかは東北地方から中部地方まで分布するものの, そのすべてが日光山塊ないし奥多摩で採集されていることは, 西日本に分布の中心を持つであろう種と比べれば好対照と言えよう。

こうした理由については, 現在まで明らかにされたことはない。そのため, ここで以下に1つの提案をしてみたと思う。

少なくとも, 第4紀のウルム氷期時代の関東地方は現在よりもひどく寒冷であった。約1万年前から2万8千年前(すなわちウルム氷期時代)の江古田層は, 花粉分析の結果によれば, 現在の気温と比べ8~14℃ほど低かっただろうと推察されている。これは現在の南アルプスの植物相で言えば標高1500m以上に当るといふ。したがってカミキリにおいても, その当時はかなり寒地性の種しか関東平野に分布で

きなかったものと考えられる。

一方, 関東平野がこれほど気温の低下を招いたのは, 単に世界的な氷期によるせいだけとは思われない。黒沢良彦(1972)は小笠原諸島のタマシ相を説明するに当り, 氷河期においては古伊豆半島が八丈島よりさらに南方の鳥島方面までつながった時期がある可能性の強さを指摘した。さらに筆者は本会で1976年に伊豆諸島のカミキリ相の成立要因を講演した時に, 古伊豆半島は三宅島までではなくて八丈島や青ヶ島を含む古八丈島とつながっていた時期があるとしか考えられない, として黒沢博士の説を支持した。なおかつ, 古伊豆半島が八丈島以南に達していたのは, その規模から言ってもウルム氷期の時代にもあったことは間違いなからう。

それが当たるとすれば, 当時の黒潮の流れは現在よりもはるか南方を通過することになり, 逆に親潮は年間を通じて古伊豆半島に達することになるから, 古伊豆半島の西と東とでは相当な気温差があったはずである。江古田層が示すような関東平野の気温の異常な低下は, このことにより理由づけられると判断してよいだろう。したがって, 古伊豆半島の西側までは到達できたカミキリでも, それを越えることができなかつた種はかなりあつたはずに違いない。それどころか, 関東地方を迂回するように中部地方から越後を経て東北方面に分布した種もあつたと考えられる。すでにウルム氷期の時代には朝鮮海峡は成立していたとされるため, 日本海の裏日本沿いに対馬海流が通過していたはずだから, 裏日本でも関東地方よりは夏期は温暖だったものと推察できる。前述7種のうちのいくつかはそのような分布をしていたであろう。

ところが, 現在に向け温暖化するにつれて古伊豆半島は分断され, 各島嶼を形成していく。そうなれば黒潮は現在のように三宅島あたりを通過し, 房総沖に達するようになる。関東地方が急激に温暖化されたのは当然である。

ここで注意しなくてはならないのは, その温暖化が古伊豆半島以西とは違って徐々に生じたのではないことである。現在の水深から判断すれば, 古八丈島を含む古伊豆半島はまず御蔵島南方, 続いて三宅島と御蔵島の間で分断されたはずである。それはとりも直さず, 現在の黒潮の流れの中心の位置を示している。御蔵島周辺をいったん通過するようになれば, 黒潮が大海流であることも加わって, 歴史的にごく短い期間で古伊豆半島の東方に大量に流れ込んだと予想される。そのため親潮は北へと追いつけられ, その結果として関東地方は急激に温暖化に向つたと考えられる。当然のことながら, これによって関東平野一円に分布していた寒地性のカミキリは, より高地ないし北方へと退いたか, あるいは急激な温暖化にたえられずに滅んだかしたであろう。すなわちクラッシュ(崩壊現象)が生じたわけである。

その結果として, 関東平野はニッチェの面でも空白状態に置かれ, 中部地方方面からの暖地性の種の



図1. サドチドリアメイロカミキリとヒゲナガアメイロカミキリの既知産地(両種を区別していない) 図2. ムモンベンベニカミキリの分布域(黒丸は長野・福島両県の既知産地) 図3. イガブチヒゲナガカミキリの分布域(黒丸は中部・東北両地方の既知産地；以下図4～6も同様) 図4. カエデヒゲナガコバネカミキリの分布域 図5. クビアカトラカミキリの分布域 図6. エゾナガヒゲカミキリの分布域

進入に大なる機会を与えた。ベーツヒラタカミキリ、ケプトハナカミキリ、ヨツスジトラカミキリ、フタオビミドリトラカミキリなどにとって、東進は容易なことではあらずである。ところが意に反し、それら暖地性の種の東進は思ったほどはかどらなかつた。現在の分布がそれを物語っている。

一方、より温帯的な種の場合には、関東への進入はさらに難しかったものと考えなければならない。世界的に温暖化に向っていたために、ウルム氷期時代には低地に分布していた種の中でより温暖な気候に適應できなかったものは、徐々により北方ないしより高地へと退かざるを得なかつた。伊豆半島より西側に分布していた種も当然そのような状況に置かれたことになる。

冒頭に述べたように、地形上の理由から関東地方へ進入するためには、海流による漂着材を考えなければ西と北からの2方向しかなく、しかも温暖化に向っているのだから北からの南下は、まずありえない。そうなると西方向、つまり関東山地を越えなければ関東に進入できない。ところが、それが容易にはいかない理由があった。

1つには富士山の活発な火山活動である。古富士ないし富士山の噴火による火山灰が関東地方南部をウルム氷期後期から末期にかけて厚く被ったことは関東ロームの存在によって明らかである。その影響により丹沢、箱根方面も植生が著しく破壊されたであろうことから、温帯的なカミキリの東進には相当な障害となったことは想像に難くない。伊豆天城山に前述7種のすべてが分布していない理由の1つとして、この時の富士火山帯の活動の影響があったものと思われる。また、前述したように暖地性カミキリの東進が意外なほどはかどらなかつたことも、明らかに火山灰の影響と見なしてよいだろう。

もう1つには、奥多摩から北へ続く関東山地が切れることなく碓氷峠へとつながっていることがある。やはり、それが種の東進に障害を多少とも与えていたことは否定できない。

なおかつ、山地へと移動することは、分布の縮小化を意味する。すなわち分布の分断であり、飛翔力の弱いカミキリにとっては、他地域への侵入は絶望と言わねばならない。

ここで前述7種の分布型を思い起したい。7種とも西日本に広く分布し、中部地方と東北地方においてはそれぞれの分布が局所的だったこと、および決して暖地性の種ではなく、多くが多少とも山地性であることに注目したい。7種が関東地方から未発見なこと、ウルム氷期以降の関東における特殊な条件とは、どうも無関係とは思われないのである。中部地方と東北地方の両方に分布する寒地性のカミキリのすべてが関東地方の日光山塊ないし奥多摩からも採集されていることは、もともとそれらが関東地方にも分布しており、温暖化に伴いより山地へと退いた結果と判断してよいことも、今まで述べてきたことの一面的な支持を与えるものであろう。

このように、中部と東北の両地方に分布しているにもかかわらず関東地方から記録のない種の存在の理由として、裏日本分布型ないし周日本海要素、または関東におけるウルム氷期以降の地史的・気候的要素にその原因を求めたが、後者の場合にはそれだけでは説明のつかないものがあることを認めねばならない。

たとえば本州以南のタケウチホソハナカミキリは中部地方以西の分布型に関してはともかく、それ以北の産地がいわき市だけなことは、前述の理由だけでは説明がつかない。これはやはり、いわき市における他のいくつかの西南日本型の食材料甲虫の分布を考えれば、黒潮の1支流にその原因を求めたくなるが、こうした分布型についての解釈は黒沢博士が深く考えられていることでもあり、同博士の発表をお願いするべきだろう。

同様に、北海道にも分布する種類については、対馬海流による漂着材の結果、あるいは樺太経由の寒冷期における南下などの可能性を加味すれば、もう少し納得のいく説明が得られるかもしれないが、筆者にはだいたい重荷なので省略せざるを得ない。

なお、前述7種がもし関東地方から発見されるとすれば、その進入経路を考えれば西丹沢、奥多摩、碓氷峠周辺のいずれかからと推察される。

末尾ながら、常日頃から分布的考察の指導を戴いている黒沢良彦博士、ならびにこの文をまとめるに当り多大な資料の提供を戴いた露木繁雄、藤田 宏両氏に厚く感謝申しあげる。

(横浜市金沢区)

#### ○オオトラフコガネの交尾

1973年7月1日、神奈川県箱根宮の下より早川に沿って塔の沢に向う途中、ゆるい傾斜地の赤松の疎林中に直径約50cm、長さ4mばかりの赤松の朽ちた倒木を発見した。樹皮を剥してみると、内部はかなりの奥まで、ボロボロに腐朽しており、赤褐色のおがくず状で、握りしめると水がにじみ出る位に湿っていた。これを分解してみると、オオトラフコガネの成虫4♂♂5♀♀が現れたが、このうち2組の雌雄は交尾中であつた。幼虫や蛹は発見出来なかつたが、おがくず状の朽木中には幼虫の糞と思われるものが多く認められたので、恐らく、これらの成虫はこの朽木を食餌として成長し、この中で羽化したものと推定される。また、交尾中の雌はやがて再びこの朽木に産卵するのではないかと考えられたので、綿密に探したが、卵もついに発見できなかった。

オオトラフコガネは花上で交尾していることもあるが、羽化場所と思える朽木の中でも交尾するらしいことが、上記の事実から推定できる。幼虫の食べていた朽木は赤松であつたが、適当に腐朽した朽木であれば樹種はそれ程選ばないのではなからうか。

なお、当日の採集行の御案内を願った小田原の平野幸彦氏に謝意を捧げる。

(東京都杉並区、石田正明)

## ○エゾクシヒゲヒラタコメツキについて

*Orithetales* 属のコメツキムシは、世界でも旧北区にわずかに知られているのみで、生きた化石的な存在である。日本からは2種の記録があり、北海道の阿寒岳から採集された標本にもとづいて、三輪博士が1934年に新種の記載をされた *Orithetales yezoensis* MIWA, 1934エゾクシヒゲヒラタコメツキは図示されているのでよく知られている。原記載には雌雄の識別はないが、図から判断すれば雄個体である。



本種は、筆者らが知る範囲では、今日までに北海道から再び得られた記録はないようであるが、筆者の1人である保田は、大雪山系の黒岳山頂において石の上に静止していた1雄個体(図)(13. vii. 1977)を見出したのでここに報告する。この種は、ヨーロッパからシベリアにかけて広く分布している *Orithetales serraticornis* (PAYKULL, 1800) にきわめてよく類似しており、筆者らは西シベリア産の個体も検したが、明確な差異は見出されなかった。おそらく、北海道のものは、旧大陸のものと同種かせいぜい亜種程度のもと思われる。分類学上の処理は、別に大平によってされる。

(愛知教育大学, 大平仁夫・北海道上川郡, 保田信紀)

## ○対馬から未記録のハネカクシ7種

対馬からのハネカクシ類は BERNHAUER (1922, 1936, 1938), 江崎・堀・安松 (1938), 渡辺 (1974, 1975), 白水・宮田 (1976), 渡辺・岸田 (1976, 1978) 等によって43種が記録されている。

今回、私の標本中に同島からは未記録の7種を見出すことができたのでここに報告する。この結果50種のハネカクシが対馬から記録されたことになる。

1. *Micropeplus fulvus japonicus* SHARP セスジチビハネカクシ

1頭, 豆酸瀬, 29. iv. 1973, 平野幸彦採集; 3頭, 木嶺山, 29. iv. 1973, 平野幸彦採集。

2. *Eleusis coarctata* SHARP オオウスバハネカクシ

1頭, 大久保, 2. v. 1973, 平野幸彦採集。

3. *Osorius taurus* SHARP ツノフトツツハネカクシ

1頭, 木嶺山, 29. iv. 1973, 平野幸彦採集; 1頭, 有明山, 4. viii. 1977, 松田 潔採集。

4. *Medon lewisius* SHARP ネアカトガリハネカクシ

1頭, 木嶺山, 1. v. 1973, 平野幸彦採集。

5. *Achenomorphus lithocharoides* (SHARP) クロニセトガリハネカクシ

1頭, 日見山, 1. v. 1973, 平野幸彦採集。

6. *Lathrobium pallipes* SHARP キアシナガハネカクシ

1頭, 佐須奈, 23. viii. 1975, 中島秀雄採集。

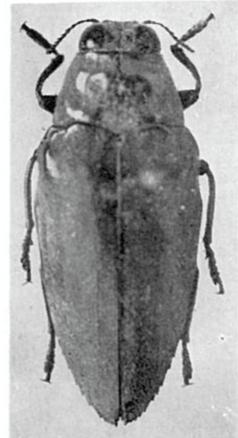
7. *Philonthus cyanipennis* (FABRICIUS) ルリコガシラハネカクシ

1頭, 御嶽, 30. vii. 1977, 松田 潔採集。

末筆ながら、貴重な標本を御恵与下された平野幸彦, 松田 潔, 中島秀雄の諸氏に深く感謝申し上げます。  
(東京都町田市, 柴田泰利)

## ○タマムシの占有行動

日本に産するタマムシ類には陽光の下で占有行動をする種類は全く知られていない。小型の種類は太陽光の下で活発に飛翔することはよく知られており、大型の種類では飛翔はほぼ直線的でゆるやかで、飛翔中に上下左右に動くことはほとんどない。ところが、昨年(1977)7月にフィリピンのミンダナオ島東海岸にあるビスリグ(Bislig)付近の森林中で観察した、キイロカタビロタマムシ *Epidellus wallacei philippinensis* E. SAUNDERS, 1874 (写真) の行動は



私たちから見れば全くの常識破りのもので、熱帯のタマムシ採集の困難さを認識させるに十分であった。

このタマムシは熱帯にあっても行動開始が遅く、午前10時頃からにわかに行動が活発になる。直射日光の照りつける林間の空地の高い梢の先に陣取っていて、同種の雄が飛来すると、直ちに追飛をし、空中で両者もつれ合って追い合い、対手を追い払うとまた元の枝先かその近くの葉上にもどって静止する。この行動を正午過ぎまで繰り返すが、その後は葉上に静止することが多くなり、なかなか見つからなくなる。このような占有行動は蝶や蠅などの昼間行動性の昆虫にはよく見られるが、私は寡聞にして、甲虫類の中にこのような占有行動をする種類があるのを知らない。

なお、本種は生きていた時には、全面鮮黄色の粉で密に覆われていて、飛び出すと、その黄色が濃い木々の緑に映えて美しく目立つ。その飛び方も一見虻か蜂に似ていて、はじめて見る時にはとてもタマムシとは思えない。本種に限らず、熱帯のウバタマムシ族のタマムシには、体一面に鮮黄色の粉で覆われる種類が多いが、これがその生活にどんな意義を有するのか、まだはっきり判っていない。

(東京都世田谷区, 黒沢良彦)

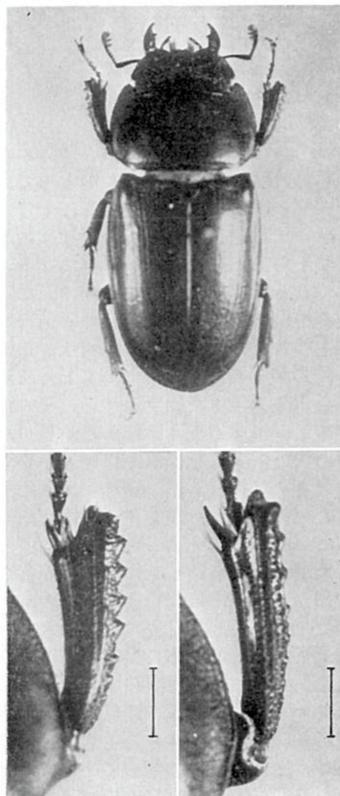
## ○ヒラタクワガタ南大東島に産す

沖縄本島の遙か400km余り東方に位置する大東諸島は、訪れる採集者も少なく、今まで昆虫類に関しては断片的な記録が残されているに過ぎない。クワガタムシ科の記録もまったく見あたらないが、筆者は水沢清行氏によって採集された南大東島産昆虫類の中に本種を見出したので記録しておく。

1♀, 南大東島池ノ沢, 5. ix. 1967, 水沢清行採集。

現在本邦に産する本種は5亜種に分けられているが、南大東島産の個体は上記の如く♀1頭のみなので、亜種の検討は将来♂が採集されることを期待して、その時に譲りたい。しかしながら本個体を見る限りでは、全体的に subsp. *okinawanus* オキナワヒラタクワガタに酷似するものの、一部に相違する点が認められたので指摘しておく。

クワガタムシ類では、特に♀の前肢脛節の形状が種の識別点として有効な標徴になる場合があるが、南大東島産の本個体は、他の亜種に比べ顕著に短くかつ幅広いことが判明した。あるいは個体変異ということも考えられたので、各亜種の多数の標本を検したがこのような個体は見出せなかった。また、頭部の点刻を比較検討したところ、本個体は他の亜種に比べ点刻が大きく密度も粗である点で明瞭に区別できた。前肢脛節の形状は、全形と共に写真によ



て示したが、左は南大東島産、右は沖縄本島産で、共に全長29mm, スケールは2mmである。

末文ながら貴重な標本の検討およびその結果の発表を快く許された水沢清行氏に深甚の敬意を表するとともに、日頃より有益な御助言を賜り、研究のため日本各地の標本を検する機会を与えていただいた東京農大昆虫学研究室の岡島秀治氏に深謝する。

(東京農大, 境野広行)

## ○ツヤハダクワガタの羽化期について

山形県下におけるツヤハダクワガタ *Ceruchus lignarius* Lewis の羽化期に関する知見は、神捧謙二氏の「ツヤハダクワガタ山形県に産す」(山形昆虫同好会々誌 Vol.5, No.1, 1975) があり、それによれば、本種は通常、春に羽化しているようであるが、筆者は昨年秋に羽化して間もないと思われそのまま越冬していた本種を採集しているため報告する。

8♂♂7♀♀(短歯型7♂♂), 米沢市滑川温泉, 3. xi. 1977, 草刈広一採集; 3♀♀, 米沢市滑川温泉, 6. xi. 1977, 神捧謙二・草刈広一採集。

また、幼虫も多数採集したが、大きさがさまざまであったことからわかるように、おそらく本種は春に羽化するものと秋に羽化するものがあるのであろう。なお、吉川賢氏、斎藤広道氏らが宮城県桑沼産の本種を飼育羽化させたことも聞いているが、それによれば、その多くが秋に羽化したということである。(山形県米沢市, 草刈広一)

## ○燈火に飛来したタマムシ

タマムシの趨光性については高尾山におけるアオタマムシの夜間採集例が記録されている(藤田宏, 1970, 本誌(11):4)が、一般に稀な事と思われる。

私は1976年1月4~5日, サイパン島で夜間採集を試みた際、寄泊した Hafadai Beach Hotel のコンクリート白壁に飛来した大型美麗種ツマベニナンヨウタマムシ *Cyphogastra auripennis longueti* Théry 2♂♂を採集した。2頭目は20~21時の間に飛来したことが確められている。いずれも壁に静止しており、その点が藤田の記録と異っていた。



(浦和市, 衣笠恵士)

## ○キンイロジョウカイの山梨県からの記録

キンイロジョウカイ *Themus episcopalis* は H. v. KIESENWETTER (1874, Berliner ent. Z. 18:269-270) により長崎を模式産地として記載され、その後中部日本以西に分布が広く知られているが、東日本からの採集記録は見当たらない。しかし筆者等は下記のごとく現時点では東限と思われる地域で本種を採集したので記録しておく。

1頭, 山梨県塩山市裂石, 20. vi. 1977, 楠採集。

なお、本個体は明方クリの花上から採集されたものである。(東京農大, 小野寛昭・楠嘉博)

○クロカナブンを伊豆新島で採る

クロカナブン *Rhomborrhina polita* WATERHOUSE は、黒沢良彦氏が鹿児島県甕島から記録されたが、その分布は主として、本州・四国・九州の本島だけに限られ、その付属島では佐渡島から記録されているだけであるとのことである。

筆者は先年クルージングの途次立寄った伊豆諸島新島で、一夜、黒根港埠頭付近から前浜沿い道路の水銀灯を見回って、若干の甲虫を採集したが、その中で本種を1頭得ているので記録しておく。

1♀, 伊豆諸島新島本村, 8. viii. 1975, 倉橋敏一採集。

本種が水銀灯に誘引されていたとは考えにくく、おそらく偶然の産物であろう。したがって本島における生息を確認するためには、さらに調査を要するものと思われる。

尚同時に得た他のコガネムシ科の甲虫は、シロスジコガネ, オオコフキコガネ, ヒメコガネ, チビサクラコガネ, ヤマトアオドウガネ, アカビロウドコガネの既知6種であった。

(東京都足立区, 倉橋敏一)

○台湾産テントウムシダマシ2種の記録

1. イナズマテントウムシダマシ *Beccariola fulgurata* (CHŪJŌ, 1938)

本種は台湾花蓮港, Yamato で採集された1頭の個体を基に中条道夫博士が記載したもので、この他には H. SAUTER によって Mt. Hoozan (宝山) から採集された1♂が知られているだけである。筆者は1975年南山溪にて本種を採集したので報告する。体長4.4mm, 最大体幅3.3mmで模式標本よりいくぶん大きめである。

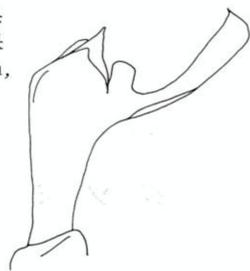
1♂, 南投県南山溪, 26. v. 1975, 久保田正秀採集。

2. トホシアシボソテントウムシダマシ *Amphistethus asterte* (STROHECKER, 1951)

本種は Dr. J. L. GRESSITT が武界で採集した1♀を基に記載された。この個体の他には H. SAUTER の採集した1♂と白水隆博士の採集した1♀の記録(木内, 1965)がある。今回、東京農大の下村徹氏の御好意により1♀の標本を検査することができたので、筆者の採集した1♂と共に報告する。下村氏の御好意に深謝したい。

1♀, 南投県日月潭, 27. v. 1976, 下村徹採集(体長9.8mm, 最大体幅5.0mm); 1♂, 高雄県扇平, 5. vi. 1976, 久保田正秀採集(体長9.0mm, 最大体幅4.6mm)。

これらの個体を今までの報告と比較したところ肩部棘状突起の形状及び体長に大きな個体差がある他、斑紋にも僅かな差異が認めら



れた。しかし雌雄による外部形態の差異は少なく、腹部末端節の形状に違いが見られる位である。今回検した♂個体の肩部棘状突起は著しく短いが、H. SAUTER の採集した♂個体は「長い」(H. F. STROHECKER, 1964)ということで雌雄の差ではなく単なる個体変異であろう。雄交尾器に関しては今まで図示されたことはないため、ここに図示しておく。

(東京農大, 久保田正秀)

帆足延夫さんを偲んで

帆足さんが暮の談話会に出席され、我々と元氣に談笑された13日後に御亡くなりになったと聞いた時は正に晴天の霹靂で、信じ様にも信じ難い気持だった。しかし、それが事実と知った時には人命のあまりのはかなさに、やり場のない怒りとも悲しみともつかない気持で胸が詰まった。

私が帆足さんにはじめて御目にかかったのはまだ大学生時代のことで、科学博物館で開催された甲虫談話会に出席した折であった。当時の帆足さんは南方航路の定期貨物船に乗り込まれていて、インドから東南アジア、さらには南太平洋のオセアニア地域にまたがる各地への航海の機会を利用しては多くの昆虫類を採集して来られた。これらの内の甲虫類は談話会の折に供覧されると同時に、興味深い多くの知見が披露された。当時は外国への採集旅行など思いもかけない時代だったので、派手な色彩や奇妙な形態をしたエキゾチックな甲虫類は同好者にとっては正に涎の出る様な代物であった。あまりに物欲し気な顔をしていたためか、それらの中からマレー産 (Prai) のハネカクンを1頭私に恵与されたが、その標本は今でも私の標本箱の中に大事に納められている。

この様な、帆足さんの航海中の採集経験は後に「南方航路の採集記 (新昆虫, 1955, 8(5): 25~27)」, 「マレー航路採虫記 (I) (同, 1958, 11(10): 14~17)」および「私の船日記から フィリッピン(ミンダナオ島)紀行 (同, 1959, 12(5/6): 16~18)」の三篇にまとめられたが、この紀行文に出てくる昆虫類を実見している我々にとっては実に楽しい読物であった。

とかく貨物船の乗組員というと神経の図太い荒々しい男性を想像するのが一般的の様に思われるが、帆足さんはそれとは全く対照的なタイプで、常に柔和で実によく気のつく方であった。談話会の席に御菓子がある時は決って帆足さんの顔が見られたが、それは帆足さんが常に御菓子持参で談話会に出席され虫談の興趣を一段と盛り上げて下さる細かな配慮の結果であった。また、帆足さんは甲虫談話会創設以来の会員で、会の発展のためには多くの御力添えをいただいた。いま、その帆足さんは逝ってしまわれた。二度と再びあの柔らかな御顔に御目にかかれなと思うと寂しい限りである。会員一同とともに心からご冥福を祈る。

(渡辺泰明)

○テバヒラタムシの採集例

テバヒラタムシ *Prostomis latoris* REITTERは、ヒラタムシ科の中でも最も特異な形態をしており、筆者のような素人でも容易に識別出来る種類である。分布は北陸館の大図鑑には北海道、本州、四国、九州と記されているだけであり、したがって九州以南の記録はなく、あまり採集されてもいないようなので、筆者の所蔵している標本を報告しておく。



1頭、屋久島大川林道, 23. vii. 1975, 桑原幸男採集; 1頭、奄美大島八津野, 2. vii. 1972, 筆者採集; 1頭(写真参照), 石垣島オモト岳, 24. iii. 1973, 筆者採集。

本種は朽木の皮下や朽木中に発見されると記されているが、筆者も朽木中から採集することが多い。(和歌山県有田郡, 的場 績)

○奥多摩のチャイロヒメコブハナカミキリ

昨年(1977)8月10日、東京都西多摩郡奥多摩町日原孫惣谷の標高約1,000m付近の所で、シシウドの花に来ていたチャイロヒメコブハナカミキリ *Pseudosieversia japonica* OHBAYASHI 1♀を採集した。奥多摩からの記録はまだないとのことなので記録しておく。(国立科学博物館, 黒沢良彦)

—— <連絡・報告> ——

◇昨年実施されました談話会の演題及び演者は下記の通りです。

第1回例会: 昭和52年3月27日, フィリピン採集談—小宮義璋(東京)。第2回例会: 昭和52年6月12日, 1. 台湾中部の注目すべきカミキリムシについて—斎藤秀生, 下村 徹(東京農大); 2. 台湾のアカコメツキムシ群について—鈴木 互(東京農大)。第3回例会: 昭和52年9月25日, 紀伊半島の歩行虫について—須賀邦耀, 森田誠司(東京都)。第4回例会: 昭和52年12月18日, フィリピン採集談—黒沢良彦(科博)。

なお、例会終了後、有志により恒例の忘年会が「鳥正」で行なわれたが、馬場金太郎、白畑孝太郎両会員も遠路はるばる参加され盛会裡に幕となった。

昆虫の器具は「志賀昆虫」へ

日本ではじめてできた有頭昆虫針!!

1, 2, 3, 4, 5号(各号200本160円)

なお、無頭針00号もできました。その他、採集・標本整理用各種器具も取揃えてあります。

〒150 東京都渋谷区渋谷1丁目7-6

電話 (03) 409-6401 (ムシは一ばん)

振替 東京 21129

志賀昆虫普及社

◇昭和52年度会計報告

一般会計収支決算報告

収入の部	支出の部
前年度繰越金 219,849	甲虫ニュース印刷費 No.37~40 329,380
会費 266,500	通信・郵送費 76,800
バックナンバー売上金 217,900	事務用品費 650
広告費 45,000	振替払込料金 50
預金利子 3,237	次年度繰越金 378,206
寄附金 32,600	
合計 785,086	合計 785,086

特別出版会会計収支決算報告

収入の部	支出の部
前年度繰越金 369,441	甲虫目録第1輯印刷費 173,000
甲虫目録第1輯売上金 115,590	次年度繰越金 322,441
預金利子 10,410	
合計 495,441	合計 495,441

◇「日本産甲虫目録第2輯」について

先に出版されました「日本産甲虫目録 第1輯」に引続いて第2輯の印刷が終了致しました。内容は下記の通りです。分譲価格については会員割引を含めて検討中ですので、決定次第御知らせ致します。

No. 8. ドロムシ科(佐藤正孝) 1頁; No. 9. ヒメドロムシ科(同) 6頁; No. 10. ダエンマルトゲムシ科(同) 1頁; No. 11. コメツキムシ科〔クシヒゲコメツキ亜科, サビキコリ亜科, ウバタマコメツキ亜科〕(大平仁夫) 7頁; No. 12. ミジンキスイムシ科(佐々治寛之) 1頁; No. 13. ホソカタムシ科(同) 5頁; No. 14. カクホソカタムシ科(同) 2頁。

甲虫談話会

会費(1カ年)1500円, 次号は6月下旬発行予定, 投稿メ切は5月20日。

発行人 黒沢良彦

発行所 甲虫談話会 東京都台東区上野公園

国立科学博物館動物研究部内

タツミの昆虫採集器具

ドイツ型標本箱 木製大 ¥5,000, 桐合板製インロー型標本箱中 ¥1,400, 送料一箱につき都内及第一地帯: 3個以下 ¥1,400, 4個以上 ¥850 (以下同様), 第2地帯 ¥1,400, ¥950, 第3地帯 ¥1,600, ¥1,050, 其他, 各種器具, 針などを製作財売して下さる。カタログを御請求下さい。(¥140)

タツミ製作所

〒113 東京都文京区湯島 2-21-25

電話 (03) 811-4547, 振替 6-113479